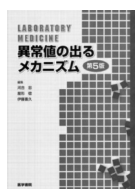


書評

●渡辺 清明 (国際医療福祉大三田病院教授・検査部)

異常値の出るメカニズム

第5版

編：河合 忠，屋形 稔，
伊藤 喜久B5 頁488 2008年
定価6,300円(本体6,000円+税5%)
[ISBN 978-4-260-00560-9]医学書院刊

本書は1985年に第1版が出版されて以来、23年間の長きにわたり臨床検査の基礎読本として多くの医師や臨床検査技師に愛読されている。

今回第5版が出版され、内容も血液化学検査、遺伝学的検査をはじめ最新の情報が加わり、前回の第4版より約70ページ増えた。具体的には関節液検査、赤血球酵素、栄養アセスメント蛋白およびシスタチンC、LDLコレステロールとリポ蛋白リパーゼ、銅およびセルロプラスミン、セロトニンおよび5-HIAA、MMP-3、抗リン脂質抗体、遺伝学的検査などが新たに項目として加えられた。これらの最新の項目の追加により旧第4版より、ますます刷新されたものになっている。また、血液化学検査については、各項目に総論が加えられ、より理解しやすいよう編纂されている。

この本の特長は、基本的な臨床検査について、どのような病態あるいは疾患で異常になるかを一つひとつの検査についてきわめて明解に解説してあることであり、これが本書が多くの医療関係者に愛読されている大きな理由である。

現在の医療の現場においては、検査なしに診療を行うのはきわめて難しくなっている。したがって、患者を診察しスクリーニング検査を行うこと

は診断に必須となっている。その際、スクリーニングに用いる尿や血液検査の値を確実に読むことは非常に重要である。つまり、基本検査値をいかに判読し、次の確定診断につなげるかは、疾患の診断や治療判定に大変重要なものである。まして、最近では医師不足、医療経済およびリスクマネジメントの問題などがあり、効率的で確実な臨床検査を行うことがあらゆる方面から要求されており、大きな課題になっている。

本書では代表的な臨床検査項目について、なぜ検査の異常が認められるようになるか、その機序を丁寧に記載している。したがって、本書を読めば、初期診療や再診時にどのように臨床検査を解釈すれば、医学的に適正な診断ができるかが理解できる。また、医療経済的にも無駄のない効率のよい臨床検査の使い方ができるかを容易に把握できる。

最近の医療においては、臨床検査が客観的数値を医師に与えるため大変多くの検査が施行されている。しかし、そのために一つひとつの検査の解釈がともすると安易に行われている傾向もないとはいえない。異常値を認めた際は、深くその意義を考え実際の医療に反映させるには本書は格好の検査ガイドとなっている。

「臨床検査の異常の出るメカニズム」をよく知り、診断のために確実に検査値を利用することは必須であるので、是非本書を利用されることをお勧めする。なぜなら臨床検査の本は多くあるが、異常値の出る機序を掘り下げて重点的に記載してある本は本書をおいてないからである。

出来うれば、本書を生涯の伴侶としてそばに携えていただければ日常診療や検査業務に大変有用と思う。